

イベント構造と日本語の（語彙的）アスペクト複合動詞

(Sub)Event Structure in Japanese Aspectual V-V Compound Constructions

佐藤 裕美

Abstract

Among the so-called Japanese V-V compounds are those dubbed “lexical aspectual compounds” by Kageyama (2013), with properties that do not parallel the typical right-head compounds. The second verbal constituent of these compounds lacks thematic roles and contributes only the aspectual information. This squib will discuss the aspectual function of the second verbal constituent in light of the interpretation of the event described and that of the internal argument of the first constituent. It will present a preliminary analysis of aspectual V-V compounds formed via incorporation of heads of the phrases representing the subevents such as process and result.

キーワード：語彙的アスペクト複合動詞、時間的限界性、イベント構造、結果、編入

1. はじめに

日本語の語彙的複合動詞 (V1-V2 Compounds) は、その特徴の1つとして、V1 と V2 が他動性協調の原則 (Transitivity Harmony Principle) に従うことが挙げられる (影山 1993、1999) が、影山 (2013) は、語彙的複合動詞の中には、他動性協調の原則の違反が多く見られるものがあることを指摘し、これらを語彙的アスペクト複合動詞として区別している。動詞アスペクトと節構造の関連についての研究の一部として、本研究ノートでは、語彙的アスペクト複合動詞の形成は、主題関係ではなく、V1 のアスペクトとイ

ベント構造により規定されることを示し、意味関係と語彙レベルの選択制限に基づく主題関係複合動詞とは異なり、イベント構造を反映した構造的な分析が必要であることを示す。

1. 日本語複合動詞の種類

日本語の複合動詞は、統語的複合動詞と語彙的アスペクト複合動詞の大きく2つに分類することができる (Kagayama 1989, 1999, 影山 1993)。複合動詞 V1-V2 において、前項の要素として受動態や「動詞的名詞 (VN) +スル」の軽動詞構造など、語彙レベル以上の統語的な構造を許容するか否かにこの2つの違いが表れる。

- (1) a. 土砂崩れが家の屋根を押し潰した。
 b. *土砂崩れで家の屋根が圧され潰した。
 (cf. 土砂崩れで家の屋根が押し潰された。)
 c. *土砂崩れが家の屋根を圧迫し潰した。
- (2) a. カオルはタケシを責め続けた。
 b. タケシはカオルに責められ続けた。
 c. カオルはタケシを非難し続けた。

「押し潰す」のように前項に受動態や軽動詞構造など統語的な構造を含むことができない場合 (1.b) (1.c)、語彙部門で形成される複合動詞であると考えることができる。これに対し、「待ち続ける」のような場合は、(2. b) (2. c) にあるように、前項に (1.b) (1.c) では不可の受動態、VN+スルの構造が許容される。これらの動詞は、統語的な構造を補部とすることから、語彙部門において形成される語彙的複合動詞とは区別され、統語的複合動詞として分類される。統語的複合動詞には、「～続ける」のほか、「～始める」、「～終わる」、「～尽くす」、「～かける」、などアスペクトを表すものが含まれる。

語彙的複合動詞は、V1 と V2 の関係は語彙レベルの個別の制約下にあり、規則的な生産性に基づく形成は不可である一方、統語的複合動詞の場合は、意味の変則性が生じない限り、V1 の選択が自由である。

- | | | |
|-----|---------|---------|
| (3) | 統語的複合動詞 | 語彙的複合動詞 |
| | 待ち続ける | 待ち望む |
| | 座り続ける | * 座り望む |
| | 考え続ける | * 考え望む |

また、統語構造の統合により生じる V1-V2 の連続においては、前項の部分動詞句の代用表現で置換可能であることも語彙的複合動詞とは異なる統語的複合動詞の特徴として指摘されている（影山 1993, 2013、由本 2005）。

- (4) a. カオルは駅に向かって歩き始めた。ケンもそうし始めた。
 b. カオルはケンを追い越した。*アキラはタケシをそうし越した。

影山（2013）では、語彙的複合動詞はさらに性質が異なる 2 つのタイプから構成されるとし、それぞれ、主題関係複合動詞（Thematic Compound Verbs）、アスペクト複合動詞（Aspectual Compound Verbs）として分類している。この 2 つのタイプの違いを、影山（2013）は、次表のようにまとめている。

2 種類の語彙的複合動詞の特徴

	主題関係複合動詞	アスペクト複合動詞
V1 と V2 の意味的關係	「V1 て、V2」(V1 が V2 を修飾)	V2 が V1 を修飾・補足
項関係（格関係）の決定	V2 が主体	V1 が主体
主語・目的語の選択制限	V2 が主体	V1 が主体
内部構造の緊密さ	緊密	比較的穏やか
構造の階層性	アスペクト複合動詞より下に位置する	主題関係複合動詞より上に位置する
他動性協調の原則	かなり厳しく適用	適用しないことが多い
他動詞から自動詞への交替	意味的な類推による創造的な造語	規則的な生産性による体系的な交替

影山（2013: 43 表 2）

上表で挙げられる 7 つの相違点は、アスペクト複合動詞が日本語において典型的な右方主要部の複合動詞とは全く異なっていることを示してい

る。まずは、主題関係複合動詞の主な特徴を概観する。

語彙的主题関係複合動詞 V1-V2 においては、(5) の例にもあるように、V2 が意味的な主要部、V1 は手段、様態、並立などの意味を付加することにより V2 を修飾する。

- (5) 寝静まる 立てかける 笑い転げる 追い越す 持ち上げる
 浮かれ騒ぐ 乞い願う 飛び越える 渡り歩く 泣きつく
 引き抜く 思いわずらう

主題関係複合動詞では、V2 は意味的な主要部であるだけでなく、文全体の項、格関係も V2 が決定する。例えば、「泣きつく」が二格をとる他動詞であることは、V1 の自動詞の「泣く」ではなく、V2 の他動詞の「つく」の性質による。

- (6) a. 悩んだ末、カオルはケンに泣きついた。
 b. * 悩んだ末、カオルはケンに泣いた。
 c. * 悩んだ末、カオルは泣きついた。

さらに、主題関係複合動詞の項構造に関して、これらの複合動詞の形成は、他動性調和の原則 (Transitivity Harmony Principle) により規制されることが知られている (影山 1993, 1999)。

(7) 他動性協調の原則

語彙的な複合動詞の形成において、複合される 2 つの動詞は下記 (a)、(b)、(c) の 3 タイプの項構造で、同じタイプの項構造を持たなければならない。

- (a) 他動詞の項構造：(x ⟨y⟩) [例] 建てる、叩く、壊す、等
 (b) 非能格動詞の項構造：(x ⟨⟩) [例] 遊ぶ、働く、泣く、等
 (c) 非対格動詞の項構造：⟨y⟩ [例] ある、着く、落ちる、等
 ただし、x は外項、y は内項を表す。

(7) で「同じタイプの項構造」と規定されているのは、つまり、複合される動詞の外項が共通であることが必要であることを意味する。¹⁾ これに

より、外項をとる (a) の他動詞、あるいは、(b) の非能格動詞が外項をもたない (c) の非体格動詞と複合動詞を形成することは不可となり、次の例によってこれを確認することができる。²⁾

- (8) a. 枝が折れ曲がる。
 b. * 枝を折り曲がる。
 c. 枝を折り曲げる。
 d. * 枝が折れ曲げる。

影山 (2013) による上掲の表が示す通り、これらの性質について、主題関係複合動詞とは異なる語彙的複合動詞が認められる。^{3), 4)} 次の例における語彙的複合動詞の V2「上げる」は、本来の語彙的意味を失い V1 が表す事態の「完了」や「結果状態」などのアスペクト情報を付加している。この場合、複合動詞の意味の中心は、V2 の「上げる」ではなく、V1 の「書く」、「練る」にある。

- (9) a. カオルは博士論文を書き上げた。
 b. 職人が餡を練り上げる。

V2 として「完了」、「結果状態」のアスペクト的意味を付加して語彙的複合動詞を形成する動詞には、以下の例文に挙げる「きる」、「果たす」、「果てる」、「上がる」も含まれると考える。

- (10) a. タケシはプレゼントされたワインを飲みきった。
 b. タケシがゴールまで走りきった。
 c. あの悪党は、性根が腐りきっている。
 d. 役者が役柄になりきる。
- (11) a. 金を使い果たす。
 b. 敵を討ち果たす。
- (12) a. 汚染のために池の魚が死に果てた。
 b. 倒木が朽ち果てる。

- c. 田中さんは息子の成績不振に困り果てた。
- d. 議員の気まぐれに秘書は弱り果てた。
- e. 台風で庭が荒れ果てた。

- (13) a. 博士論文が書き上がった。
b. 餡が練り上がった。

(10) の複合動詞では、V2に他動詞「きる」、V1には他動詞「飲む」、非能格動詞「走る」、非対格動詞「腐る」「なる」のように項構造が異なる動詞が生起し、他動性協調の原則の制約を受けていないことがわかる。他動詞「果たす」と非対格動詞「果てる」はそれぞれV1に他動詞、非対格動詞を伴い複合動詞を形成している。また、(13)では、本来的には非対格動詞の「上がる」がV2としてV1に他動詞「書く」「練る」をとり、さらに、V1の内項が文の主語となっている。これは、V2「上がる」によりV1が非対格化され、統語にも影響していると考えられる。このように、アスペクト的複合動詞は、主題関係複合動詞においてV1がその語彙的意味によって主要部のV2と様々な意味的な関係をもち、複合的な意味を表すのとは大きく異なっている。アスペクト複合動詞は、複合語として語彙部門で形成される主題関係複合動詞とは異なると考えるのが妥当であろう。

2. アスペクト複合動詞とイベント構造

前節で見たように、主題関係複合動詞とは異なり、アスペクト複合動詞⁵⁾では、項に意味役割を与えるのはV1のみで、V2は常に、V1が表す動作（プロセス）の完結を表す、あるいは結果状態を表すといったアスペクト情報を追加している。ここでは、アスペクト複合動詞のV2によって、表される事象にどのような影響があるかを観察したい。

日本語では名詞句に限定詞が必須ではないため、他動詞とその目的語が限界性のある事態を表すか否かはあいまいになり得る。しかし、「きる」や「上げる」を伴うアスペクト複合動詞では、同じ名詞句を目的語としても事態の終結を意味することになる。⁶⁾

- (14) a. タケシはプレゼントされたワインを飲んだ。まだ瓶に半分残っている。

- b. タケシはプレゼントされたワインを飲んだ。もう瓶は空だ。
- (15) a. タケシはプレゼントされたワインを飲みきった。# まだ瓶に半分残っている。
b. タケシはプレゼントされたワインを飲みきった。もう瓶は空だ。
- (16) —週末は何をしましたか？
a. —論文を書きました。でもまだ書き終えていません。
b. —論文を書き上げました。# でもまだ書き終えていません。

非能格動詞の場合は、目的語によって限界性を表すことはないことに加え、「走る」のような活動動詞のアスペクトは終結を内包しない。複合動詞「走りきる」は、(17.a) のように終点が明示された場合は、可能な文になるが、終点が明示されない (17.b) の場合、タケシがどこを走ったかについて文脈上の情報がなければ、意味をなさない。

- (17) a. タケシがゴールまで走りきった。
b. # タケシが走りきった。

V2「きる」は、V1 が表す事態が終結に至る下位事象を潜在的に内包する、あるいは、活動が時間的限界に達する事を表す要素が存在する場合にのみ許容されることがわかる。終点の存在が文脈上顕在し (17.b) が解釈可能な場合は、時間的限界に関わる文中の非明示的な要素が「きる」を許可していると考えられることができる。

(18) のように明示的な限定表現によって特定されない名詞句が「～きる」の目的語にある場合、この目的語は必然的に特定されたものを表している。特定された目的語により、限界点を必要とする「きる」の要求が満たされていると見ることができる。

- (18) ワインを飲みきった
(cf. ワインを飲んだ。)

(11.a)、(11. b) の「果たす」を含む複合動詞の目的語についても、特

定された金額、敵が意図され、同様のことが言える。

V2「きる」、「果てる」は到達動詞のV1とともに複合動詞を形成することができる(10.c-d)、(12.a-e)。「なる」「腐る」「死ぬ」「朽ちる」などV1の到達動詞は、変化に至るプロセスを表さずに瞬時の変化により結果に至ることがその意味であるため、これらのV2によって複合動詞を形成するまでもなく、それ自身が終結・結果を必然的に表している。実際、これら複合動詞が言及するのは、単に1つの事態の終結ではないことが観察される。例えば、「池の魚が死に果てた」(12.a)では、内項の「池の魚」は複数として解釈されなければならず、死の事態が複数起り、それがすべて終結したことが表されている。上述のように、アスペクト複合動詞のV2はプロセスの終結に関わる要素によって許可さえることを仮定すると、このような場合、複数の事態からなるプロセスの解釈を引き出す、限定された複数の対象物を表す内項の性質がV2と一致関係にあることが必要になる。

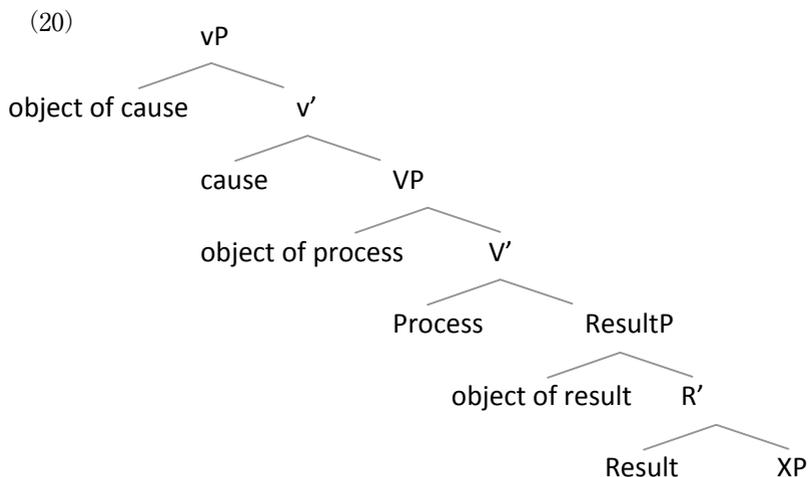
「腐る」、「弱る」、「なる」も「～テイル」形が進行ではなく、結果状態を表すなど到達動詞の特徴をもつ。

- (19) a. みかんが腐っている。
 b. 木の根元が弱っている。
 c. 外が騒がしくなっている。

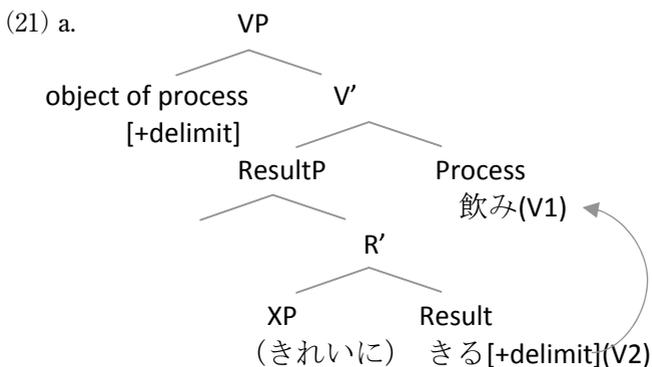
「腐りきる」(10.c)、「なりきる」(10.d)「弱り果てる」(12.d)の例では、「死に果てる」の場合のように複数の事態が言及されることはなく、「きる」「果てる」によってV1の事態がもたらす結果状態の程度の限界点に言及されていると考えられる。(19)が表すような到達動詞としての特徴を示しながらも、対象が変化した結果として至る状態に程度の幅がある場合は、結果状態の限界点がV2の「きる」、「果たす」を許可していると考えられる。

アスペクト複合動詞では、主題関係はV1によるが、V2がV1の内項の特定/不特定、単数/複数に関する解釈等に影響することを上で見たが、これらはすべてアスペクト複合動詞のV2がプロセスや状態の限界点を必要としていることで一貫している。アスペクト複合動詞を形成するV2が統語構造において、適切な要素と一致することで観察された性質について一定の説明が可能になると思われる。Butt and Ramchand

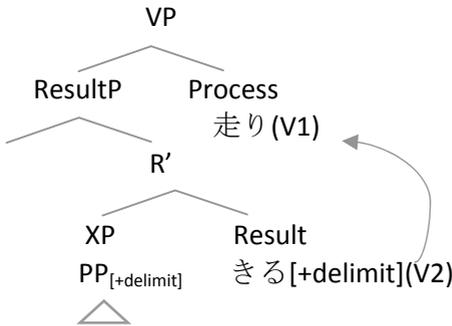
(202)、Ramchand (2008) が提案する (20) に示すイベント構造 (Event Structure) を反映した構造を前提にし、アスペクト複合動詞の V2 が Path/Result Phrase の主要部であり、V1 に編入する過程でプロセス、状態の限界点になる要素と一致関係になる仕組みを仮定してみよう。



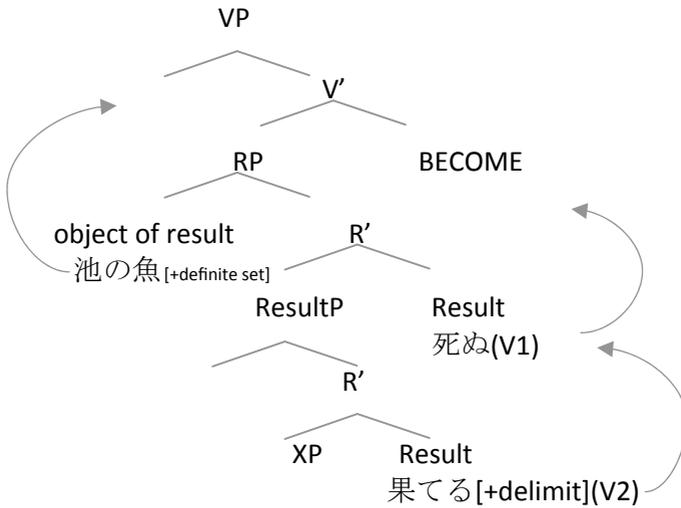
日本語の語順を反映した下記の構造で、日本語のアスペクト複合動詞の構造は、V2 が下位事象を表す構造から V(1) への編入を通して限界性についての一貫を満たすと捉えることができる。



b.



c.



3. アスペクト複合動詞「～上げる」「～上がる」

これまで見てきたアスペクト複合動詞では、V1が項関係を決定し、V2がそれを改変することはなかった。しかし、「～上がる」の場合は異なる。

- (22) a. 画家が肖像画を描き上げた。
- b. 肖像画が描き上がった。

(22.b) ではV1「描く」の内項である「肖像画」が主語となり、「描く」

の外項は現れていない。前節で想定した構造的な分析を踏まえると、V2が「上がる」の場合、対格動詞であるV1の非体格化の現象は、非対格動詞の「上がる」の編入の影響により、V1が非対格化され、V1の外項が吸収されるという説明が可能になる。

最後に、「上げる」と「上がる」の場合で、V1としてアスペクト複合動詞を形成する動詞に違いがあることについて考えてみたい。Kageyama (2018) は、この問題を取り上げ、「上げる」は漸進的なプロセスや状態変化を表す動詞をV1とすることが可能であるが、「上がる」についてはその条件では不足があることを示している。

- (23) a. 歌を歌い上げた。／*歌が歌い上がった。
 b. 参加者の人数を数え上げた。／*参加者の人数が数え上がった。
 c. 身体を鍛え上げた。／*身体が鍛え上がった。
 d. 守衛を縛り上げた。／*守衛が縛り上がった。
 e. 子供を一人前に育て上げた。／*子供が一人前に育て上がった。

(Kageyama 2018:112 (27))

Kageyama (2018) では、「～上がる」は結果を表す「成果物」(product)の存在が必要であることを主張している。(23.b)の「～上がる」が不可の例が次のような「～上げる／～上がる」の双方が可能な例とどのように違っているのか、「成果物」の定義についてさらに検討の必要があると思われる。

- (24) a. グラスを磨き上げた。／グラスが磨き上がった。
 b. 肉を焼き上げた。／肉が焼き上がった。
 c. 髪を洗い上げた。／髪が洗い上がった。

少なくとも、「～上がる」の場合は、V1の内項の性質がプロセスの結果、影響を受け変化する必要がある（「成果物」となる）ことが、ほとんどの場合に共通している。歌い上げた歌 (23.a)、数え上げた人数 (23.b)、縛り上げた守衛 (23.d) 自体は変化しないため、これらについて「上がる」を用いた複合動詞は不適格となると考えられる。「上がる」が編入することによって、非対格化され、プロセスを引き起こす causer としての外項

が不在となることから、内項の変化に焦点が当てられる解釈となることも、上記の構造に基づく編入の結果として説明ができる。

4. まとめ

アスペクト補助動詞によらない、語彙的アスペクト複合動詞（アスペクト V1-V2 複合動詞）は、表される事態が時間的な限界をもつことを必要とし、V1 のアスペクト的性質や V1 によって表されるプロセスやその結果の対象の解釈にも影響が及ぶ。アスペクト複合動詞を形成する V2 は、潜在的に終結に至ることが可能な事態を表す動詞とのみ複合動詞を形成することから、これらの V2 は、イベント構造の一部として結果状態に関わる構造の主要部の要素と仮定することにより、V2 が V1 に編入する過程で、V2 が求める限界性に対する要件が V1 の項との一致によって満たされるなど構造上の説明が可能になる。また、「～上げる」、「～上がる」に見られる、V1 の非対格化や目的語に対する制約などについても同様の趣旨に沿った説明が可能になる。ここで示された可能性について今後、構造面からの根拠を示し、比較言語研究を含めたさらなる検討が必要である。

註

- (1) 影山 (2013) は、この原則に反し、他動詞 + 非対格動詞から形成される語彙的複合動詞として、「突き刺さる」「覆い被さる」「積み重なる」「(ミサイルが) 打ち上がる」を挙げている。しかし、これらの複合動詞が可能であるのは、V1 が元来の動作主を含意せず意味が希薄化し、V2 が表す 事態の様態変化、結果を修飾する副詞的要素として再解釈されていることによるとしている。
- (2) 語彙的複合動詞とは異なり、統語的複合動詞は他動性協調の原則の制約を受けない。項構造のタイプに関わらず、V1 として可能。
 - (i) a. 子供が絵本を読み終えた。
 - b. タケシは大学を卒業する前から働き始めた。
 - c. ハチ公は渋谷駅の象徴であり続けるだろう。
- (3) 語彙的アスペクト複合動詞が統語的複合動詞とは異なることは、V2 が受動態、動詞句代用表現など統語的構造を含む補部を除外することにより示される。
 - (i) a. * 報告書がまとめられ上げた
 - b. * 着物が縫い上がり、襦袢もそうし上がった
- (4) 影山 (2013) は、国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」データベースの基礎資料から、合計 2,439 語の複合動詞について他動強調の原則の適用度と違反率を計算した結果を示している。これによると、この原則の違反率は、主題関係複合動詞については、10.05% である一方、アスペクト複合動詞では 28.6% にのぼる。主題関係

複合動詞についての違反はほんの1割程度にとどまり、しかもその多くが注1にあるように純粋な違反というよりは、周辺的な現象として説明が可能である一方、アスペクト複合動詞については30%近くが違反していることはこの2つの語彙的複合動詞の形態構造の違いを反映していると述べている。

- (5) 影山 (2013) では、語彙的アスペクト複合動詞として、時間的アクティオンズアルトのほか、「見まわす」、「鳴りわたる」などの空間的アクティオンズアルト、「思いやる」、「存じ上げる」などの対人関係に関係する人称的アクティオンズアルト、も含めて分類しているが、本稿では、時間との関わりで事象の展開を表す、時間的アクティオンズアルト/アスペクトに限定して語彙的アスペクト複合動詞を分析する。
- (6) 数量詞を含む名詞句を目的語にとる次の (i) (ii) の例では、「きる」を伴っても事態の終結を意味しないことについての査読者からの指摘に感謝したい。このような文においては、数量詞によって限定された名詞句によって事態の終結が示されると考えられる。
- (i) (文脈：タケシは40歳の誕生日に歳の数だけの本数のワインをプレゼントされた。)タケシはプレゼントされたワインを20本飲みきった。まだ箱に半分残っている。
- (ii) 論文を40ページ書き上げました。でもまだ書き終えていません。
- (i) においては、20本のすべてが消費され、(ii) では40ページまでが書き終わった、というように数量詞20、40によって限界が示されている。

参考文献

- Butt and Ramchand (2002). Complex Aspectual Structure in Hindi/Urdu. *Oxford University Working Papers in Linguistics, Philosophy & Phonetics*. (pp. 1-30). Oxford University.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge University Press.
- Girogi, A., & Pianesi, F. (1997). *Tense and Aspect: From Semantics to Morphosyntax*. Oxford University Press.
- Kageyama, T. (1989). The Palce of Morhology in the Grammar: Verb-Verb Compounds in Japanese. *Yearbook of Morphology* (pp. 73-94). Berlin: Springer.
- Kageyama, T. (1999). Word Formation. In Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics* (pp. 297-325). Oxford: Blackwell.
- Kageyama, T. (2018). Agents in anticausative and decausative compound verbs. In T. Kageyama, W. M. Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (pp.89-124) . Berlin: De Gruyter.
- MacDonald, J. E. (2008). Domain of Aspectual Interpretation. *Linguistic Inquiry*, 39 (1), 128-146.
- Ramchand (2008). *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reichenbach, H. (1947). *Elements of Symbolic Logic*. Berkeley: University of California Press.
- Thompson, E. (2006). The Sturcture of Bounded Events. *Linguistic Inquiry*, 37 (2), 211-

228.

Travis, L. 1991. Inner aspect and the structure of VP. Ms., McGill University.

Zagona, K. (1990). Times as temporal argument structure. Manuscript. University of Washington.

影山太郎. (1993). 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.

影山太郎. (1999). 『形態論と意味』 東京：くろしお出版.

影山太郎. (2013). 「語彙的複合動詞の新体系－その理論的・応用的意味合い－」 影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて』（pp. 3-46. 東京：ひつじ書房.

金田一春彦. (1976). 『日本語動詞のアスペクト』 東京：むぎ書房.

工藤真由美. (1987). 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』（p. 91）. 東京：むぎ書房.

工藤真由美. (1989). 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会（編）, 『ことばの科学』 Vol. 3. (pp.53-118.

工藤真由美. (1995). 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間表現－』 東京：ひつじ書房.

須藤義治. (2010). 『現代日本語のアスペクト論』 東京：ひつじ書房.

寺村秀夫. (1984). 『日本語のシンタックスと意味』 Vol. II. 東京：くろしお出版.

長谷部郁子. (2013). 「複合動詞と2種類のアスペクト」 影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて』（pp. 75-74）. 東京：ひつじ書房.

由本陽子. (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語－モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 東京：ひつじ書房.